

## 第1回ひょうご未来の高校教育あり方検討委員会議事録

1 日 時 : 令和2年6月29日(月) 10:00~12:00

2 場 所 : 兵庫県職員会館 多目的ホール

### 3 内 容 :

#### (1) 開会挨拶

各委員の皆様方には平素から兵庫県の教育のために、色々な場面でご尽力をいただいておりますことを、この場をお借りしてお礼申し上げたいと思います。また今回は、検討委員会の委員にご就任いただくにあたり、ご快諾いただきありがとうございます。本来であれば、改めてこの場において、お一人お一人に委嘱状をお渡ししなければならないところですが、口頭にて委嘱させていただきたいと思います。

さて、今回は委員会の名称を考えるのに非常に苦労しました。昨今、ご承知のとおり、世の中はグローバル化、ICT技術の発達など、我々の見通しがなかなか難しい時代を迎えています。そのような中であって、兵庫県の教育をどのように進めていくかということ踏まえて、「第3期ひょうご教育創造プラン」を策定させていただきましたが、今回の議論を進めていただくにあたって、「今後の高校教育はどうあるべきか」という内容にはじまり、県立高校の役割、あり方を模索していただきたいと考えましたので、「高校教育のあり方」という、少し幅広い名称をつけさせていただいたところです。

これまで、県立高校では「学びたいことが学べる学校づくり」という方向性を基本に進めてまいりました。具体的には、通学区域を16学区から5学区に再編するとともに、多様な特色ある学科を設置してまいりました。一昔前であれば、普通科はあくまで普通の学科でしたが、国においても、普通科にどのような特色を備えていくべきかという議論が交わされているように、高校の学科というのも本当に多種多様になってきました。

このような中で、兵庫県の県立高校においても、今後どのような学びを進めていかなければならないかというご意見を幅広く賜りたいと思っております。そして、これは日本だけの現象ではありませんが、少子高齢化が進行し、子どもの数もどんどん減ってきています。このような状況の中で、学びたいことが学べる学校を、引き続き維持していくためには、県立学校はどのようにあるべきかということも、1つの論点であると思っております。

いずれにしても、子どもたちが未来に向かって自らの力を十二分に発揮できる教育を進めていくための高校教育のあり方について幅広くご議論いただく中で、県立学校としての役割を検討して参りたいという思いは従前から一貫しております。

今年度末までの短い期間ではありますが、活発なご議論をお願いしまして、私のご挨拶とさせていただきます。

#### (2) 委員紹介

#### (3) 委員長・副委員長選出

委員長：長瀬 荘一 副委員長：山下 晃一

#### (4) 協議内容：

(委員長)

県の方から、「ひょうご未来の高校教育あり方検討委員会」の委員就任の依頼があったとき、私

も長年、中高大学生を相手に教育にかかわってきましたので、委員の皆さんと同じように、大変重要なお仕事だなと感じました。しかも、来年の3月までの1年間に渡るとても大切なお仕事だと感じながら、非力でございますが引き受けさせていただきました。

初めに、この委員会に臨む私なりの心構えについて申し上げまして、委員の皆さんのご協力をいただければというふうに思っております。

まず、この会に臨む私たちの基本的な姿勢を述べますと、あくまでも私が考える中心的な視点ではありますが、それは言うまでもなく高校生を中心に置くということです。

高校生が一生の発達段階の中で、どのような位置にあるかと考えると、皆さんご存じの通り、青年期の中期にあたるわけです。中学生が青年期の前期、高校生が青年期の中期、大学生が青年期の後期というふうに発達段階で分かれるわけで、青年期中期にあたる高校生に、中心的な視点を定めるということです。その青年期の中期というのがどういう時期かといいますと、心理的には不安定な時期でありまして、色々悩んだり、友達関係などにおいて葛藤が生まれる時期であります。

その一方で、高校時代というのは自分の職業選択に向けた興味関心が深まったり、職業的な能力が急激に伸びる時期でございます。そういう意味で、高校生、大学生は一旦ツボにはまると、びっくりするほど大きな能力を開花させるという経験を度々しています。

このような高校生を私たちの中心的な視点に据えた委員会にしたいというのが第一の願いです。

第二に、現在という時代の社会状況ですが、今は、高校在学中に選挙権を手にする時代です。これは私たちの時代とは違っているわけです。従って、私たちが中心的な視点に据える高校生は、この3年の間に、社会的な自立をして選挙権を持つという状況にあることを、私たちは間違えないようにして、高校生が置かれた状況というものを見ておきたいというのが2つ目です。

最後の第三に、私たちの視点の先に何があるかということですが、高校生は卒業後、日本や世界を舞台にして一人一人が人生という旅に出るわけです。それが世界に出るのか、日本に出るのか、或いは兵庫県内のローカルな地域で働くかは別にして、いずれにしても、まずは高校を卒業して、日本、世界を視野に置きながら、一人一人が人生という旅に出ます。その旅に出る前段階のステージであるのが高校です。その子どもたちが人生の旅に出るまでのステージとして高校教育がどのようであればいいのか、それを考えるのが私たちの仕事です。つまり、その支援を可能とする条件整備がこの会の課題でもあると思っています。

こういう意味でこの委員会では、高校生の現在と未来を常に正面に据えた議論を行いたいと思っております。先ほど委員の皆様方のお顔ぶれを拝見しましたが、各分野から、経験豊かな見識、知恵を備えた方ばかりです。是非ともそれを、兵庫県の高校教育の将来のあり方に対してご提供いただき、この委員会を良いものにしたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

さて、本委員会の設置趣旨ですが、事前配布資料にもありましたとおり、1つは、現行の「県立高等学校教育改革第二次実施計画」の推進状況に関する評価・検証を行うということです。2つ目は、時代の急激な変化にも対応できる力を高校生に身につけさせるために必要な高校教育のあり方、教育内容を示すことです。3つ目が、この高校教育の方向性を実現可能とするために必要な、県立高校の環境・制度的な仕組みなどのあり方の方向性を示すことですが、これは具体的な話の前に、あり方の方向性を示すことが大切であると考えています。

高校教育について考えるとき、一般的には、教育課程、カリキュラム、生徒指導、或いは、入学者選抜、通学区域など、様々な側面が思い起こされるわけですが、本委員会の議論のスタートは、高校生を正面に据えて、10年後、30年後、50年後の中長期的なスパンで高校教育を見つめて、そして、未来の子どもたち、生徒たちにとって有意義な高校教育のあり方を考えるところから始めたいと思います。

特に本日は第1回であり、事前に委員の皆さんから色々のご意見を伺っていますが、それらに加えて、皆さんから多くのお考えを出していただき、「あ、この案はいいな」、「自分では気がつかなかったけれどもこの案は大事だな」と思うことに対して是非賛同していただきたいと思えます。そして、賛同していただくと同時に、「さらにこういうことがあるのでは？」という、新しいアイデアを出していただき、今日は12時までの予定ですので、委員の皆さんから、高校生へ向けたメッセージと言いますか、「こういうことをしようよ」というふうなアイデアを思い切りいただけるとありがたいと思えます。このような心構えですので、どうぞ宜しくお願いいたしますということを申し上げて、ご挨拶の代わりにさせていただきます。

続いて、協議に入る前に、会議の公開・非公開について、委員の皆さんにお諮りしなければなりません。先ほどから申し上げておりますとおり、本検討委員会は、平成26年から継続実施されている、県立高等学校教育改革第二次実施計画の推進状況の評価・検証等を行うことから、議論の中で、地域や高校の個別具体的な話が出ることも十分に予想されます。そのため、委員の皆さんによる自由な立場での率直な意見交換や、公平・公正な協議を確保したいと思っております。そのため、会議及び会議資料は非公開とすることが適当ではないかと考えています。

ただし、一方で委員会での協議内容については、広く県民に情報を公開することも必要ですので、委員の名前を伏せた形での発言内容を、次回の委員会で事務局から報告していただいた上で、委員の皆さんから承認いただき、速やかに適切な方法で公表するというにすることが良いと思っておりますがいかがでしょうか。

(委員、賛同)

(委員長)

ありがとうございます。

それでは、そのようにいたしますので、事務局で取り扱い方、宜しくお願いします。

(委員長)

この検討委員会の検討事項は大きく2つです。1つは、平成26年度から継続実施されている「県立高等学校教育改革第二次実施計画」の評価です。もう1つは、今後、少子化が進む中、高校教育の更なる充実を図るために必要な県立高校の望ましい教育内容、或いは環境等のあり方についての方向性を考えるということです。どうぞ宜しくお願いします。

以上を踏まえた上で、本日の協議内容は2点ということになります。

まず1点目は、5月末に事務局から配布しております資料について、委員の皆さんから頂いたご意見について、事務局から説明をいただいた後に、委員の皆さんからの質問やご意見をお伺いしたいと思います。

次に、委員の皆さんからの第二次実施計画の評価と課題を含む意見をもとにして、今後、本委員会で議論すべき課題について協議をし、内容を整理していきたいと思えます。この委員会での議論は3月まで続きますが、今日はその第1回目ということで宜しくお願いします。

それでは、以上のような手順で、まずは事務局から事前資料についての説明をしていただきますが、これをお聞きになった上で、質問や意見、また、新たに思いついた意見であるとかそういうものを幅広くいただくのが今日の趣旨です。時間の許す限り、自由な発想でご意見をいただきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

では、事務局から説明をお願いします。

(事務局による資料説明)

(委員長)

これからの議論の進め方ですが、今、説明いただいた資料についての疑問、或いは、お聞きになってのご意見を伺いたいと思います。

その後に、第二次実施計画の評価と課題と、この委員会で議論すべき観点についてのご意見を伺いたいと思います。

ではまず、今、事務局からご説明いただいた内容についての疑問、或いは関連するご意見、補足をいただきたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

「ここはどういう意味ですか」とか、「確かにそう思います」とか、言っていただけるとありがたいと思います。

いかがでしょうか。

この会は、大学の先生方もおられますし、各領域・分野の専門の方もおられますし、保護者の方もおられますし、学校の先生もおられますし、どういう立場でも結構です。

(委員)

質問ではないのですが、冒頭に委員長からご挨拶いただいた中で、これから10年後、30年後、50年後の社会を見通した高校教育のあり方を検討する必要があるのではないか、というお話をいただきましたので、10年後、30年後、50年後がどのような社会になっているのかが予測できる人口動態や、それに伴う兵庫県の状況などに関する資料があれば、発言しやすくなるのではないかと感じました。

(委員長)

そのあたり、事務局でまた準備されると思いますが、逆に、委員の皆さんの10年前はどうだったのかということを考えます。10年前の状況は、まあ結構イメージできるのですが、30年前となると、私の場合30代です。世の中にワープロというものが出てきて、次にパソコンができました。初めは2行ぐらいのワープロで始まったわけですが、活字になって文書が出てくるということがとても感動的でした。次に、大きな図体をしたパソコンが登場して、大学でパソコン教室に通って勉強した覚えがあります。このような形でパソコンというものが、我々一般の者に入ってくるのが30年前です。

パソコンが入ってきた30年前を思い起こしたとき、スマホの時代の30年後の未来を予測することは極めて難しいですが、それを予測しないと考えられないので、この部分については、大学の先生も含めて、「こういう時代になりますよ」ということも教えていただきたいと思います。

次に50年後となってくると、さらに予測が困難ですが、一方で、コロナのようなものが、私たちの生活の中心課題になるとは誰も思っていませんでしたので、私などは、4月中旬に、ひょっとするとコロナで社会が崩壊してしまうのかなと思ったものですから、そこから考えると、50年後にはこういう未曾有のことも起こりうると思います。そこまでの予測を高校教育の未来に落とし込むことは難しいかもしれませんが、コロナのような状況もあり得るという想定はしておく必要があると思っています。

資料は事務局に後日出していただきますが、折角、10年後、30年後、50年後の話題をいただきましたので、これに関して、ご意見等がある方はおられませんか。

(委員)

長期的な視野を持ってものを考えるというのは非常に大事だと思います。ただ一方で、この教育改革については、兵庫県はこれまで、第一次実施計画、第二次実施計画をそれぞれ策定する前

にこのような委員会を設置して議論していただきましたが、社会の変化がなかなか見通せないということで、第二次実施計画については当初5年計画として平成20年に策定し、平成26年の委員会の報告を受けて、今まで継続実施しています。

30年後、50年後を見通すということは当然必要ですが、この委員会としては、やはり10年先くらいまでのところを見通した具体のイメージにもとづいて議論し、それを次年度、事務局で具体の実施計画にさせていただくというような感じなのかなと思っています。

(委員長)

最終的にはそのような議論になると思います。

今の高校生が30年後には40代になります。10年先以降については基本的に予測不可能だけれど、その時点の社会がどのようになっているかを考えておかないと、視野としては持つておかないといけないと思っています。

しかしながら、この委員会では、そのような大きな話だけでは済みませんので、第1回目についてはそういう大きな視野を持つことの視座もあっていいと思っています。

(委員)

現代の社会の変動は激しく、グローバル化に伴い、文化の問題をはじめとして、ナショナリズムの高揚、分断や格差など様々な問題が生じています。兵庫県の教育基本計画の中にも、「こころ」の問題を大きく取り上げておられますが、そういうことが、やはりこれからもとても大切です。

高校生は成長の一過程ですが、「こころ」が成長しきれていないために大学生になって燃え尽き症候群に陥って社会に出て行けないという話がある一方で、工業高校や商業高校で在学中に技能検定などを受けながら実学に長けた人材が、社会の即戦力として頑張っているというような状況があります。

このような状況を踏まえて、委員の皆さんには専門家の立場から、そもそも兵庫県ではどのような人間を育てようとしているのかという部分を、冒頭に整理させていただいて教わりたいと思います。

資料を見せていただいて、これまでの取組は、ほとんど問題ないというか良く取り組んでおられるなと思っています。

(委員長)

今のお話のように、これは論点にしようという形を出していただけたら結構かと思います。

その他、10年後、30年後、50年後という話がありましたので、この点について、ご意見があれば、伺いますがいかがでしょうか。

(委員)

分断とか、格差という話がありましたが、あと一点、やはり、今後感染症の再来がたぶん繰り返されるだろうという前提に立ちまして、高校生と、それを教える教員、あと学校運営のあり方も、予測のつかない大きな変化に対して、危機的な変化への対応力というのをやはり考えていかないと本当に厳しい時代だなと思います。この辺の視点も少し必要かなと個人的に感じます。

(委員長)

今のお二方のご発言は後の項目として残していただきたいと思います。

その前に、10年後、30年後、50年後についてご発言がある方、特にないですか。

なければ、事務局からの説明についての疑問、意見、その他をいただきたいと思います。

(特になし)

(委員長)

特になければ、次に入りたいと思います。

それでは、今日の本題にまいります。第二次実施計画の評価と課題として、いただいた意見をもとにして、この委員会で議論をすべき論点について、伺いますので、宜しくお願いします。

これからの高校教育を考えるにあたって、どのような観点で議論をしていったらいいのか、既にお二方から意見を伺いましたが、これを本日決めていく必要がございます。それで、議論の柱とする観点について、ご意見をいただければと思いますので、自由におっしゃっていただければと思います。事務局の方で、後ほど上手に整理をしていただきますので、自由な立場でご発言をしていただければありがたく思います。

その際に、私からお願いできればということではありますが、国立教育政策研究所の先生を含め、大学の先生方がたくさんおられますので、お伺いしたいことは、大学、さらには広く社会が求める教育のあり方、或いは社会が求めている教育の内容について、大学教育、高等教育のレベルでどのような教育の内容、或いはその手法が行われているのかということをご指摘していただけるとありがたいと思っております。

それから、学校関係者の皆さんもたくさんおられます。中学、高校の現状、それから地域ごとの状況について、兵庫県は南から北まで非常に広い県ですので、地域ごとの状況を踏まえたご意見をいただきたいと思っております。

保護者の皆さん、行政を含む各分野のご専門の方がおられますので、保護者または各分野のご専門の視点から、高校の学びに期待することなど、大きな方向性について、また、こういうことをこれから議論しようというかたちで、ご提言いただけるとありがたいと思っております。

残り時間は1時間程度と、十分に時間がありますので、今日は必ず一回以上は発言して帰るぞという気持ちでいていただけるとありがたいと思っております。

(委員)

この委員会の名称について、初めて県立高校という枠を外していただき、「ひょうご未来の高校教育あり方委員会」ということで、今回は私学も兵庫の未来の高校教育の一翼を担う立場でありますので、そういう観点でお話をいただけるのかどうか、それが一番気になっているところです。今までは、公立と私学というのはいつも県教委と私立学校の協議会というところでやり取りをするという形でしかあげていただかなかったのですけれども、私学も公立とともに公教育の一翼を担っているんだという自負がありますので、そういう観点で私学のことも含めて考えていただきたいと思っております。

(委員長)

先ほど教育長がおっしゃったように、まずは、公立も私学も含めて、高校はどうあったらいいかを一緒に考えましょうよということから議論を始めて、その上で、県立高校がすることと、独自性や建学の精神を有する私学で考えることの議論になると思います。まずは、兵庫の高校教育のあり方を一緒に考えましょうというスタンスです。

その上で、この委員会は県の委員会ですので、最終的には県立高校をどうするのかということになると思いますし、私学をどうするかということではこの委員会ではちょっと踏み込めないと思います。

しかしながら、私学も公立も一緒に子どもを育てるということでは一致していますので、まず

は共に考えましょうという枠組の中で、県としてはこういうことをしたいと思います、それを踏まえて、私学としてはこのようにします、ということ別途お考えいただくというふうに思います。

仕分けとしてはそれでよろしいでしょうか。

(事務局)

はい。そのように考えております。

どのような力が高校生に必要なかということは、私学であろうが県立であろうが同じ議論だと思いますのが、最終的に具体的な施策をとることになると、やはり我々としては県立高校をどのようにしていくのかということになります。

ただ、この委員会では、兵庫の高校のあり方ということも含めて話していただけたらと思います。

(委員長)

私学、公立というのは後の話で、まずは、私立の知恵、公立の知恵を出しあって、そこから勉強するというような形で良いと思っていますので、どうぞ宜しくお願いします。

他の委員の皆さんはいかがでしょう。これからの議題・論点について、先程の話の繰り返しにはなりますが、これから論点の柱の1つにしましょうよというような内容を、もう半歩補っていただくとどのようなことがありますか。

(委員)

補うということではないのですが、やはりどんな人間を育てるかについて、皆さんとコンセンサスを取りながら進めたいと思います。

先程言ったように世の中のバックグラウンドはどんどん変わっていきますから、1つには限定できないでしょうが、少なくともやはり、どんな人間を育てるかということは大切だと思います。例えば、いつの時代も大事なものは「寛容」ではないかというようなものです。

今、普通科では進学が約7割になっているという時代に、本当に進学させるんだったら進学をきちんとやるのが普通科であると。普通科の高校の中に、美術や何かの特色はあっていいのですが、やはりどんな人間を育てるのかという視点が、委員会が始まる前に最初にあるのかなと思って今日は出席しました。そういう視点が定まった上で、実際の議論に入っていくのかなという疑問があったので質問しました。

現在の若者は、知識というものは結構持っていると思うのですが、その反面、それがやはり実践できない人が多い。だから、知恵というものがとても大事だと思います。知識から知恵の社会に変えていくような人間を育てる必要があると思います。

例えば、グローバルな人間になろうと思うと、少なくともディベートができないといけない。議論できる人間でないといけないと思います。

今は、すごく優秀な学校を出て企業に入ってきた若者が、ペーパーテストはよくできるけれども、実際に仕事をやらせてみると変数に対応できない。与えられたペーパーのときは良いが、対応能力が低いと見えるときがあります。

だから、そういうこともひっくるめて、どういう人間を育てていくのかということ、それは、普通科であろうが職業学科であろうが、全てに影響してくるのでないかなという思いがあります。

(委員長)

今のご発言をフォローされる方もいらっしゃると思うのですが、どのような人を育てるかということを議論の1つにしましょうというご提案ですので、後ほど関連した議論の時間をとりたいと思います。

(委員)

フォローになるかどうか微妙ですが、この委員会は中央教育審議会とはまた別の位置づけだと思います。だから、兵庫県の高校生が特殊なものではなく、そういう現代の高校生が普遍的に身につけなければいけない力をつけていかなければならない。日本を背負っていく、或いは世界で活躍するために、どういう力があるかというのは文科省が出していて、それが学習指導要領や教育施策の中に出てきているので、今、文科省がどのような施策を打っているのかということは、当然、資料では県からも出せると思うので、そういうのを見ていただいて、ご理解いただいた上で議論できればと思います。そのような国の方向性から兵庫県も外れることはできないと思いますので、そういうふうにしていけば、おっしゃったようなところも議論できるのではないかと思います。

(委員)

実は、令和元年から令和5年までの基本計画である、「第三期ひょうご教育創造プラン」が、すでにできあがっており、その作成の過程で、社会の動きなどは想定されているわけです。もちろん、これを作成したのは令和元年ですから、現在の全ての課題が想定されていたわけではないですが、この中に、兵庫の教育の目指す姿ということで、「目指す人間像」というようなところも入っています。

大きなテーマとしては、「未来への道を切り拓く力の育成」という形でまとめられていますが、この時点で兵庫県の教育委員会として、こういう人間を育てるんだという、社会の今後の見通しなども含めて作られていますので、是非、事務局のほうから委員の方々に資料提供をしていただいて、これらも踏まえた上での議論をする必要があるのではないかと思います。

ついでに、私の意見も少し述べさせていただくと、このプランを作成したときは、例えば今回のコロナのような災いが生じて、長期の休業を迫られるなどというようなことは誰も考えていませんでした。具体的には、オンライン教育など、これは私学も公立も同じなのですが、そういったことはまったく想定しない中で、今年は大混乱の2ヶ月3ヶ月を送ったわけですけど、やはり、そういう今後の教育に必要な方法論の中で、例えば、急な災害に対して ICT を活用した教育や、防災教育や、或いは、政治的教養の教育ですとか、地域と連携していく教育、さらに、これは前から言われていますが、高校では特に探究活動を進めることが求められています。また、通級制度というものが始まっていますが、高校にも特別支援学級で学んできた生徒が入学してきていて、その教育をどうするかということも始まっています。それから、外国籍の生徒も特別枠で入学できる制度もできていますので、実は、今まで想定されなかったことに対する新しい教育を、色々な形でやろうとしています。したがって、そういう新たに必要な教育というのはどのようなものなのか、というようにところで議論をするということは必要ではないのかと思っています。

それから、もう一点は、喫緊の課題として、子どもたちがどんどん減っていくということです。子どもたちが減っていくということは、当然、学校が小さくなるわけで、先生方の数も減ります。そのような中で、活力を維持するとともに、魅力化・特色化していくということは実際なかなか厳しい状況にあるわけです。

学校が小さくなっていく中でさらに魅力を出していくことはなかなか難しく、例えば、総合学科では、生徒の関心に応じて沢山の科目を置くというのが魅力なのですが、規模が小さく

なったら、そういうことができなくなっていくと思います。

また一方で、多部制高校という、県内の三部制の学校では、非常に希望者が多く、むしろそういう学校はもっと増やしていく必要もあります。

或いは、高校ではどんどん生徒が減っていますが、特別支援学校は生徒がどんどん増えていきます。このような、今の少子化といえますか、そういうことを考えたときに、それぞれ望ましい規模とか配置とか、どのように考えていく必要があるのか。これには、地域ごとの課題もありますし、全体で考えなくてはいけない課題もありますが、そういったことについては、是非皆さん方の色々なご意見も聞かせていただき、学校現場として頑張るところは頑張っていかなければいけないし、県教育委員会としても方向性を是非議論してほしいと思っています。

#### (委員長)

今までの議論を一回整理しますと、1つは、「どういう人間を育てるのか」、「これからはどういう力を育てるのが大切なのか」ということを議論のベースとして話し合いたいという点です。

2つ目は、今後必要な教育は何かという問いに対して、抽象論ではなく、ICTや、人権の問題や、或いは外国人の子どもたちの受け入れなどの具体的な項目を、今後必要な教育として挙げていきましょうということです。これについては、すでに沢山の意見を出していただきましたが、それ以外にもあると思いますので、それぞれ出していただき、それらに軽重をつけていくということが2つ目であると思います。

3つ目は、子どもが減少していますので、制度的にどうフォローしていくかという、これも大切な課題です。

そのような観点ですので、今のところ、1、2、3と3つの内容が必要です。今後も、私たちのスタンスとしては、今の順番で議論を進めていくことができるとしています。これを、途中の整理としまして、さらに、これに加えてご発言いただければありがたいと思います。

#### (委員)

先ほど、委員長から、三点に整理していただいたことに関して、少しコメントをさせていただければと思います。

どういった人間を育てるか、力を育てるかという点に関しまして、先ほど10年で議論するのか、30年で議論するのか、50年で議論するのかというお話がありましたが、今、学術的に議論されているのは、「自ら学習していく能力を身につける」ということは、時代が変わってもそれほど変わらず必要なものであるということです。学校の中で、「自ら学習する力」をつけておけば、10年後30年後50年後に社会が変化しても、それに対応できるというわけです。「自ら学習する力」、最近では「非認知能力」と呼ばれるような、「自己統制力」、「勤勉性」のようなものは、過去の研究、基本的には海外の研究ですけれども、生涯にわたって、大人になって自立してから、生活の満足度等にもかなり影響しているという話があります。

そういう力を身につけていくということを考えたときに、技術的な問題として、具体的な教育方法、さらには今、何ができるか、ということが重要な議論になるのではないかと考えています。

その他、ICTの活用というものがどれだけ可能なのか、ICTの効能はどのようなものなのか、というようなことについて議論を進めていく必要があるのではないかと考えています。

特に今回、たまたまコロナという事態が発生して、配布された資料にあったように、休業中において、ICTを活用したり、ICTを活用しなかったりというところで、各校において異なるやり方がありましたので、その経験を通して、「ICTでできたこと」、「できなかったこと」、ということ一度整理していくことは、県としても必要なかなと思っています。

ICTも万能ではありませんので、特に「できなかったこと」というのが、これからの学校で、取

り組むべき課題として捉えられるのではないかと思います。

3点目の、子どもたちが減少していく中で、教育条件をどう整理していくかということですが、こちらも例えば、先ほどのICTの効能というものが、どのように影響するのか。ICTを例に挙げると、効果があるのは、主に教科学習であるので、実技の少ないような教科学習が仮に可能であるならば、学校の数を大きくする、少なくするという話ではなくて、教師が個々にICTを通して、子どもに指導をするというような体制も考えられますし、ICTで指導できないようなものがあるのであれば、県としてどういうふうに学びを保証していくのかということを考える必要があります。

(委員長)

今、全国的な視野から特に大切だと思われる点を挙げていただきました。

それではこの議論をさらに続けたいと思いますが、今の3点の視点もありますが、それに加えてでも結構ですし、こういうことについて議論の柱としましょうよということを、第二次計画の評価も含めて言っていただけるとありがたいと思います。

(委員)

3つの柱ということに同意します。

先ほどの話にも出てきたと思うのですが、例えば、「どんな人間を育てるか」というときに、「何を学ばいいのか」ということだけでなく、「どうやって学ぶのか」ということが大切だと思いますが、これは次期学習指導要領でも謳われていますし、個々の授業の中でもそれが言われているわけです。一方、大きな視野で言いますと、例えば少子化に対応して学校の数をどうするのかというときに、遠隔授業という方法をとることで、現時点では少し難しいけれども、可能になる学びもあるでしょう。

また、定時制通信制の生徒たちの中には大変な状況を抱えている生徒もいます。障害のある生徒、外国籍の生徒、それから子どもを産み育てながら学んでいる生徒もいます。従来の高校のスタイルではなかなか学べないこれらの生徒たちに、どのような学びを提供していくことができるのか。そのことを、それぞれの3つの大きな柱とともに、検討していただければありがたいと思います。

(委員長)

「どのように学ぶか」ということも教育の方法を考える上で、議論の1つとしましょうというご意見です。事務局で整理をお願いします。

こういうふうなご発言をいただけると、委員長として大変ありがたく思います。

(委員)

私は、これまでの話の流れが、なかなか理解できません。なぜ理解できないかというと、今、議論されているのが、どのレベルの話をされているのかがよく分からないからです。

経営でいうと、経営理念、戦略、施策、マネジメントのような、それぞれレイヤーがあって、「こういう理念にもとづいて現実とのギャップを埋めるためにこういう戦略をつくる。それを実現するために…」という、階層的に話を進めていきます。

今現在、話をすべきことというのは、理念の話なのか、目先のマネジメントや仕組みの話なのか、戦略の話なのか、というものが何もかも混在しているので、今、何の話をすべきなのか。

(委員長)

2回目からは、レイヤーを整理して、理念があつて、方法があつて、という話になると思うんですけども、第1回目の今回は、2回目以降どのような筋道で、どのような段階で話をしていきますでしょうか、というところですので、大まかな意見が出てきたり、方法論が出てきたり、個別具体的な話が出てきますが、今日の1時間はフリーで良いと思っています。

それを今後、整理していきますので、今日はあまり、方法だとか、理念だなどというようなことを関係なく、思うことを言っていたら、次からは事務局から整理されて出てくると思っています。

(委員)

そうすると、あるべき姿というか、国がある程度枠組みを出して、それに準じて方向性というものを出しますよ、というものが必要と感じます。国の出されているものが、まだ共有できていないので、それをベースに話をしていけないといけません。

例えば、これからの社会において、ダイバーシティとか、多様性というものはとても大事です。女性活躍という流れもあるし、そうすると男性も家事をしないといけなくなる。そうすると、家庭科を男性がもっと自立できるような教育にしなければいけないよねというような方向性に落ちてくる。でも、その前に、多様性を大事にする教育をしましょうというものがあつて、それが教育施策になるので、この部分をもう少し共有できていた方が良いという気がします。

(委員長)

これは、事務局の思いも、私の思いも同じだと思うのですが、1つはこの委員会の進め方として、国が言っていることと兵庫県の特性と合わせて、一定の方向性にするのは一般的かもしれませんが、今回は、コロナも含めて、時代が今までの私たちでは読めないものになっているので、国はこう言っていますということはもちろん出してくるのですが、それを先立たせないようにして、まずは、委員それぞれの分野、保護者、先生方、私学或いは経営の方々から、今本当に必要なことはこういうことではないかとことをまずフリーに出していただきたいと思っています。その上で、今、事務局としては、国が言っているものにどういものが付け加えられるかと思つて一生懸命探していると思いますので、今日は、思いっきり自由に言っていただきたいのです。

この意見を経て、2回目からは安定した進め方になると思います。

(委員)

そういう意味では、今申し上げたような、多様性というものを前提とした社会を生き抜くための力というものを身につけていくという1つの考え方はあるのかなと思います。

(委員長)

多様性ということになってくると、大学生の多様性、生徒の多様性、或いは興味関心の多様性に対して教育環境としてどのように対応していくか。具体的には、教育内容とか、教える側の姿勢とか、様々なレベルがあります。これは特に大切だなと思われるところがあつたら教えていただくと助かります。

(委員)

多様性というのは、人口統計学的な多様性と、知識や考え方などの内面的な多様性に分けて考えることができ、人口統計学的な多様性というのは、もちろん人種などの部分になるのですが、それも環境などが整わないと、なかなか対応する教育というのは難しいのです。今、国際寮など

を作って、「日本人も外国の方もみんな一緒に生活しましょうよ」みたいな、そういう取組があつて、その一方で、考え方とか価値観に対する多様性に対する受容度をどうやって高めていくのかという取組が、とても大切な要素になっています。

「普通はこうだよ」 という表現がすごく危険で、「普通というのはあなたにとっての普通であつて、私の普通ではないよね」というようなところが、どのように尊重されていたり、どのように意見を聞きとったり、それに対して適切に反論したりということが難しい。

そういう部分で、意見を戦わせるとか、そういったものに繋がっていくのが、多様な社会で生きる力だと考えています。

ですので、ディベートに代表されるように、色々な形で相手の意見を尊重しながら自分の意見を言えるような環境が大切です。今は、皆さんどちらかというといい子で、人の意見に対して「今の意見良いと思います」みたいな子が段々増えてきています。多分学校でそういう教育をされていて、「他人の意見を尊重しましょう」というフレーズが、「ただ受け容れていればいいですね」という内容に置き換えられているような感じがするので、そうではなく、ちゃんと主張しながら相手の意見を尊重するという部分がすごく大切だなと感じます。

(委員長)

もう一步踏み込んで、我々は大学生を教えていますけれど、大学から見て、制度的な多様性や、生徒の個別的な内面的な多様性などについて、高校でこういうことをしてくれるとありがたいというような感想などはないですか。

(委員)

突飛な意見とか、変な意見に対して、「普通そうじゃないよね」という指導を、小中高で頻繁にされてきていて、それはやめていただきたいと思います。

(委員長)

それは、内容に関してですか。

(委員)

はい。「普通こうだよ」というノーマルの正解が結構あつて、「何々をしたいのであればこうするのが正解」とか、「何々のお題が出たときにはこう答えるのが正解」とか、そういう答えが結構あるので。

(委員長)

それは授業内容について考えてもらいたいな、というようにところに落とし込んでですか。

(委員)

いや、授業に関しては多分正解があります。高校の授業は特にそうです。1 + 1 = 3 でいいですというのはないと思うのですけれど、例えば、他の活動、ホームルームでの活動とか、いわゆる受験科目じゃない、答えがあるものじゃないものの教育に関しては、勉強の仕方でもいいですし、メニューを考えると、そういうところで色々な尖った意見とかを活かせるような教育が必要と感じます。

(委員)

今のお話に共感しています。

今回のコロナの中でも自粛警察というようなことが話題になりました。自分の価値観を人に押しつける。そういうことが何か日本人の弱点の1つではないのかなと感じています。そういうような日本人の特性を形成したのが教育の中の1つの問題かもしれないというように最近を感じています。

例えば、校則です。校則があるおかげで、学校経営、学校運営はとてもやり易いのですが、理不尽な校則があれば、例えば高校生であれば3年間、理不尽を強いられ続けている。高校生、中学生でも同じことなのですが、校則が自分たちの生活にどのような影響を与えているのかということをもう少し子どもたち自身が考えていって、主体的に子どもたちが物事を決めていって、クラス経営をしていくとか、学校運営をしていくとか、そういうようなことがもう少し日本でも普通にできればいいというふうなことを感じています。

特に、いじめの問題などで強く感じるのは、「自分と違うものについて排除することが悪いことではない」というような認識を持っていることです。もしかしたら、子どもだけでなく大人も同じような認識を持っているかもしれない、そのようなことをすごく感じています。

例えば、私はよく言っているのですが、校則を全部見直します。理不尽な校則であればそれは全部変えるべきだということを、校長先生方にはお願いしています。東京都のある区の中学校では、制服に関して、月に1回は私服を着ておいでという指導をしています。主体性を持って中学生らしい服を着てくるというようなことを教育として導入されていると聞きました。もちろん、どの地域でもできるかどうかは分かりませんが、少なくとも、自分と違う感覚や考えや感性を持っている人に対して、認めていく、人の意見をちゃんと聞く、というような力を持たせることが、これからとても大切ではないかと感じています。

(委員)

皆さんの議論を聞かせていただきまして、どんな人間を育てていくか、どんな力を育てていくかということからは、多くの生徒を預かっている私としましては、多様性のこの時代に、一人一人の生徒が自分の得意分野をどのように自分で見極めて、それを学校がどのように育てていくか、どれだけ支援していくかというのが私たちの使命であるというふうに考えています。従って、兵庫県が行っている第二次実施計画で、それぞれの学校が魅力づくりに努力していますが、それが中学校のときに自分に合った特色を持った学校をどのように選んでいくかというようなことも大切だとは思いますが、各校の魅力や個性を今回の委員会でもどのように整理していったらいいのかなと自分自身では考えています。学区内の近隣に同じようなタイプの学校がある場合、人口が多いところは良いと思うのですが、人口が少ない地域になると、そこに同じような特色のある学校があるというところが、学校経営的に非常に厳しいところもあります。

そして、柱の3本目にあるように、具体的に今後必要なものは何かとか、少子化に向けた学校の制度をどうすべきかということについては、郡部と都市部の高校では、学校、人口規模が全く違うので、同じ兵庫県の教育として、高校生を育てていく中で、ある程度の学校規模は、学校経営、魅力ある学校づくりに必要ではないかと、今、感じています。

そういう辺りを、ここで議論していただけたらありがたいと感じています。

(委員)

5学区になって、1ページ目の資料に書いてある通りなのですね。例えば、子どもたちの中には、トライやるウィークを経験して、そこで老人福祉施設に行き、将来福祉のことをまず学びたい、だから福祉のことをやっている学校を選ぶという生徒が、実際に多い。多いというか、一定比率いるということも事実です。その一方で、先ほどお話もありましたが、人口が凄く減ってきていて、中学校の生徒数が減っています。同時に、交通網によって、子どもたちの進路選択が、

凄く影響を受けているということが、ここ数年はっきりと数字でも顕著になっているのではないかと思います。そのあたりを申し上げたいと思っています。確かに、神戸のような交通網の発達したところであれば選びやすいということはあるのですが、一方で、兵庫県の中部または北部に行きますと、もう移動が非常に難しい。しかも地元の子どもの数が減っている。その中で、各高校が差別化した教育をしていくというのは非常に困難が生じてきているのではないのでしょうか。先ほどからも多様性という話がありましたけれど、私の個人的な意見としては、全て公立で、公（おおよけ）でやる必要はないのではないかと考えています。極端ですが、オンラインや私立や公立を含めながら、本当に子どもたちが一生、私たち大人もそうですが、「一生学べる県＝兵庫」そういうものを作り上げるべきだと思います。この資料の中の4ページ目で一番下に「シングルマザーの生徒が日曜日のスクーリング行けるように」というのが教育の多様化ではないかなと考えています。まあアメリカならこんなことは普通なので、是非そういうようなところも目指していただけたらありがたいと思います。くどいですが、5学区にしてプラス面は非常にあったということは申し上げます。ただ、昨今の人口減とか、交通網の発達の差によって、地域によって、子どもたちの思いが十分達せられていないことも出てきているということをお話ししたいと思います。

(委員長)

地域の多様性であるとか、生徒の興味関心であるとか、能力等々に合わせた、制度設計のお話でした。

(委員)

今の委員の方々のご意見に、付け加えたいところが2点あります。

1つは多様性についてです。大学では、多様性に2つの段階があると思っています。1つは受け容れる、認めるという段階です。大学では、いろいろな価値観の人がいるとか、性別とか、ジェンダーとかをオフィシャルには少なくとも認めるという段階は達成している学生は多いように思います。その一方で、「認める」で終わらずにそれをどう活用していくとか、多様性をどう活かしていくとか、そこら辺がまだできていないところが大学の段階だと思います。

それから、これまでもたくさん出てきた ICT について1つ思ったことは、今回も学習支援などということで、先生方は短期間のところで努力されて、今、色々な形で学習支援をしていらっしゃるということがわかりました。これを、教室の場面で行われている教育を担保するためだけの ICT で終わらずに、これからの ICT 教育に活かしていく、ネガティブなところを補足するための ICT ではなく、もう少しポジティブな方に、発展的なところにも着目していけると良いと思いました。大学でも、オンラインで授業をしていると、大学に出てこない学生が参加していたりとか、或いは、カウンセリングの場面でもオンラインの方が、敷居が低い学生がいたりという形で、ICT だからこそそういう所もあるのかなと思っています。

(委員長)

多様性や ICT の可能性についてのご意見でした。

(委員)

第3回の協議予定のテーマの中に、入学者選抜制度等についてというのがあるので、そのときに発言させていただこうかと思っていましたが、自分が選ぶ、自分が行きたい学校へ行くという制度と、県立高校のセーフティーネットの考え方とで、若干矛盾が生じてきているのではないかと思います。セーフティーネットというのは、例えば、志願変更、第一志望に加算点を与えると

かです。さらに言うと、私学入試よりも前に校長先生の推薦という形で学科などを受けるわけですが、推薦を受けると私学を選べないという意味において、本当に私学に行きたいとか、公立でもここへ行きたい、けどそこは無理だからこっちに行きなさい、という指導がされているというような制度が気になっています。もう1つは、前期と後期で選抜を行う中で、県教委も非常に苦労されている所ですが、日程的にタイトです。例えば、今回のコロナみたいなことが起こってくると、追試をどこでやるのかとちょっと心配しているところがあります。全く余裕がありません。そして、複数志願では、第二志望と第一志望とを同じ学校で採点したもので振り分けられるために、他校との採点に差が出ないかというようなところで、今、問題になっているような、考え方を問うとか、論述式をするとか、そういうような問題が出せない状況になっておられるように感じているところです。そういう意味において、どういう学校を選んでいくか、そして、公私協調していくかという中で、この入学制度のところをしっかりと議論していただくことをお願いしたいと思います。

(委員長)

ご発言のない方はぜひともご発言いただきたいのとあわせて、第二次実施計画の評価に関わってご発言があれば、それも伺いたいと思っています。

(委員)

以前、高校で主権者教育が話題になったと思いますが、私たちも、社会に適応していく子どもたちをどのように育てていくのかとか、社会を形成したり社会を変えていく子どもたちをどのように育てていくのかで、悩んでいます。よく、「こんなことをしたら高校では通用しない」と言っていますが、「高校を変えたら」というふうな発想は、本当に大切だと思います。今あるものの中からはなかなか疑問を見いだせない子どもたちが多くて、例えばクーラーが効きすぎて寒くなった時、大人だったら何か羽織ればよいが、子どもたちはカッターだから羽織れないとか。何か羽織ればよいと思うのですが、そういう意見もなかなか出てこないということがあります。自分たちの住んでいる学校、高校を変えるということは社会を変えるのだということが主権者教育だと思うので、そういう自分たちの集団を変えていけたらということは、きっと社会に出ても役に立つと思っています。

あと一点は、地域の学校についてです。私が勤務する地域では、だんだん人が減ってくるので、高校と市が連携して、例えば夏祭りを高校生に企画してもらったりとかすると、プレゼン力もつくし、そこでディベートもするので、地域の活性化と高校生の力をうまくマッチングできれば、それぞれの地域もさらによくなると個人的には思っています。地域との連携とか、貢献とかいうところもできれば良いと思っています。

(委員)

最初、委員長の話の中で、青年中期の話をしておられました。藤井聡太7段のことを思い浮かべました。彼に迫っていくような子どもたちが兵庫県にもたくさんいると、私は思っていますが、それを育成するには、家庭教育、家庭の環境もすごく大きいでしょうが、それと学校教育をリンクさせていくことが、非常に大事だと思います。学びの環境というのは、この委員会を進めていく上で解決していかなければならない問題です。学びの環境について、どういう方向性を出していくのか、また、実際に子どもたちと向かい合う先生方や教職員の方や、地域やそういう方がその方向性をどのように支持していくか、そういうものをまとめあげていける委員会になっていくことを願っています。

(委員)

今年、阪神淡路大震災から25年ということで、そのときの教訓であったり、経験をしっかりと活かしながら、小中高通じて教育をされてきたと思います。その上に立って、高校として学ぶべきものであったり、それをどのように自己能力としていくのかといったことも、この委員会の中で議論されるのではないかと考えています。2年前に策定された第3期ひょうご教育創造プランの中でも、生きる力を育む教育が謳われていました。国でも、2回前の学習指導要領だっと思いますが、生きる力を育むということがキーワードになっていたと思います。その上に立って、兵庫はこれまでも体験学習・体験教育であったり、キャリア教育であったり、実践してきているので、この点はしっかり続けていってほしいと思っています。その中で、地域との結びつきであったり、家庭との連携であったり、様々なことに発展をしていくと思います。そういう意味で、兵庫県は北から南まで約300kmある大変広い地域の中に学校が点在していることもあります。意見の中にも出ていたように、通学の問題であるとか、様々な課題があるので、今ある学校も大事にしていくべきだと思います。しかしながら、その中で、規模であったり、様々な教育を充実させていくにはどうしていったらいいのかということも、考えていく必要があると思います。

(委員)

これまでの意見とほぼ同じような意見になりますが、ICT教育等の推進の中で、プラスの面だけでなく、マイナスの面のリスクも出てくると思うので、そういったことも含めて、今の段階では気づかないこともあるかもしれませんが、議論の中で気づいていくこと、リスクの面も挙げていくべきだと思います。

(委員)

小学校では今年度から学習指導要領が新しいものになって進めつつありますが、この2か月の休校は痛かったと思います。というのは、小学校の入り口にあたる1年生の児童たちが、10年後に高校生になるわけですが、この子たちが、なぜ学ぶのか、どう学ぶのか、ということを知らないまま、家庭学習で、「早く」、「たくさん」といった形で勉強せざるをえなかったのが痛かったと思います。小学校は、子どもたちに何を教えるかと同時に、保護者にも学びの価値観みたいなものを伝えるところであると思っています。おこがましいですが、保護者の方にも育ってほしいと願っています。

小学校では来年から、小学校1年生にパソコンの端末が入ってくるので、子どもたちの方が早く習得してしまうのではないかとということで、教員の方も、学ばないといけない、学び続けないといけないということは課題であると感じます。

(委員)

学校の適正規模ということで、郡部の学校においては、1つの学校が廃校になると10km先、20km先に行かなければならないという現状もあるので、なかなか統廃合は難しいと思っています。

資料の5ページに郡部での30人学級という意見も出ているので、そのようなことが可能であれば、統廃合ではなく、残していく形で考えられるなと思いました。

一方、教育課程に関して、小規模の学校では、いろいろな科目を生徒に提供していくのが難しくなっているというような現状なので、ある程度の学級数をもった学校も必要だと考えています。

また、入試にリンクして、都市部の学校では選択肢が広がっていると思いますが、生徒が通学の利便性のある学校に集中したりすることもあるので、様々な観点から入試を考えて、一人でも多くの生徒がメリットを感じるようにしていくべきだと考えています。

(委員)

「高校教育に何を求めるか」ということは、「どんな人を育てるのか」ということと同義であるという点については大いに賛同しました。高校教育は義務教育ではありませんが、ほとんどの中学生が高校に進学します。実際には、何になりたいか、具体的な将来の夢を持って高校に進学する人はあまりいないと思いますし、少ないと思います。高校で教育を受けていく中で、色々なことや社会を知って、自分を見つけていくということが、すごく大切になるのではないかと思いますので、その辺のところを、子どもたちにも、親たちにもわかりやすい教育になってほしいと思っています。

(委員)

話を伺いながら考えていたのですが、兵庫県の公教育という点から言うと、県立高校が落としてはいけない観点というのは、やはり、地域格差だとか、恵まれない世帯への指導できる環境が整えられるかということがひとつのポイントではないかと思います。1つのアイデアとして、総合学科などで多様なことを指導しないといけない、そういう体制を作らなければならない、或いは、兵庫県でも普通科高校で多様な教育のパターンを維持しなければならないといったときに、ICTの活用も1つの検討課題ではないかと思いました。

(副委員長)

本日の議論の柱は、論点について洗い出すということなので、追加したいと思います。まず1つは、高校教育のあり方で一番大切ところで、さきほど、地域格差ということとか、学校の規模ということで、通学の便利・不便ということもあり、小規模な高校をどうするかという話がありましたが、これは非常に悩ましい課題だと思いました。ただ、例えば、ICTを活用することで、もしかすると思切ったスリム化をするということもあってもいいかもしれないと考えました。その上で、例えば、対面でなければならない部分、集団でなければならない部分というものが、いったいどういう場面なのかということを探査していく必要があるのではないかと思います。というのも、我々が高校生に豊かな青年期を保障しようとするならば、同世代の多様な人たちとの出会いは欠かせないことであり、これは小規模では絶対的に難しいことです。ただ、そこでも、もしかするとICTを介しての出会いもあるのかもしれません。そうしたときに、我々がどのくらい対面でなければならないこと、集団でなければならないことを精査していけるのかということ、多様な人間関係づくりという視点から考えてみる必要があります。その上で、学校の規模ということを見据えていくことは必要だということが一点目です。

二点目に、今回のパンデミック、コロナ対応で明らかになってきたことは、予想以上にテクノロジーは進歩するのだが、それを使いこなす人間というものに、もう一度焦点が当たっているという実感があるという点です。人間的で情緒的な側面へのニーズがもう一度高まってきていて、案外、原点回帰になってきているのではないかと思います。その上で考えたときに、高校の先生方の力量をどう捉えるかと考えると、2つの面から捉えることが必要かと思います。1つには、私の立場で言うと、学問ということにもっと高校の先生にはこだわっていただきたいということです。先ほど申し上げたように、改めて人間とは何かという根源的な問いがもう一回浮上しているので、高校の先生方自身が、人間や社会や自然に深く迫るような学問をしていただき、それを生徒と一緒に探っていくようなことが必要です。これまでは、出来合いの知識をどういうふうに伝えるかということだったと思いますが、そうではなく、先生方に日々学問を実践していただき、それを生徒と分かち合いながら育てていく、そういうイメージの転換を徹底できるような高校教育のあり方であってほしいと願います。その一方で、先ほどの人間関係づくりの補完に関わってくるのですが、先生たちが高校教育の実践の中で積み重ねてこられたこと、特に若い人にどう

向き合うかというケアのあり方などに関する知恵と工夫は見るべきものがありますが、それが全然県民と共有できていないということがあります。高校の中では共有されているかもしれませんが、県民の大人がそれらを広く共有した上で、若い人をどのように見つめていくのか、支えていくのかということ、考える時代になってきたという気がしており、そうしたことが何らかの形で高校教育制度のあり方に反映できることはないのかということをおもっています。

3つ目には、小中高の学校間のつなぎの問題で、我々大学関係者も入ると思いますが、いったい何をつなげていくのか、何がつながっているのか、何がつながっていないのかを精査しながら考えていくことが必要であると思います。そのとき、ポイントとなるのが学力ということであって、学力というものに我々が一体どんな豊かな意味を持たせていけるのか、このあたりが曖昧なままに、今進んできていると感じます。国でも大きな転換が求められています、それらを見据えつつ、兵庫流の、兵庫県なりの公立も私立も含めた学力観がちょっと深まって、そこがキーポイントになって、小中高大が繋がっていくと、すごく面白いということも思いました。少し話が飛躍していますが、もう一度話を戻すと、学校間の接続の問題を改めて考える必要があるという気がしています。

#### (委員長)

今日の時点の簡単なまとめをする必要があると思います。できるだけ手短かに私のまとめを申し上げますので、後は意見聴取のところを出していただければと思います。

今回の委員会の趣旨は第二次実施計画の評価ということです。今日は直接このところはいかなものかという意見はありませんでしたが、本日の意見を含めて、第二次実施計画の評価と課題について、事務局の方で整理をしていただき、こういう評価でどうかというものを次回に示していただきたいと思います。

今後の議論の進め方、視点ということで、たくさんあるわけですが、項目だけ、気がついたところを申し上げ、これが議論の観点になるのかなと思っています。

- 1) 1つ目は、これからの社会を生きるために、どのような力が必要なのか、どのような力を人として身につける必要があるのか、それをまず議論するということです。その際、文科省の出されたものもあるので、それを含めて議論をしようというのが1つ目です。
- 2) 2つ目は、今後の教育に必要な項目、ICTであったり、外国籍の子どもであったり、そういった具体的な教育の項目について洗い出し、その1つひとつについて検討していこうというのが2つ目です。
- 3) 3つ目は、子どもが減少していくので、それに対応する活力のある学校教育が必要になります。子どもの減少に関しても対応について考えていこうというのが3つ目です。
- 4) 4つ目が、生徒の多様性は無視できない。生徒の多様性に対応できる学校にしていこうということです。多様性をどう捉えて、どのように対応していくか、学校の教育内容レベル、制度的なレベルで、生徒の多様性に対応できる教育について議論しようというのが4つ目です。
- 5) 5つ目が地域性です。兵庫県には地域格差が少なからずあるので、地域性についても議論していこうというのが5つ目である。
- 6) 6つ目が制度的な面についてです。入試制度であったり、公立と私学の協調であったり、そういった制度的なことについても議論をしていこうというのが6つ目です。
- 7) 7つ目が、ICTの活用が、人間関係づくりを含めた、或いは制度的なものとも関連した可能性を持っているのではないかと、ということで、ICTの可能性とか活用についても一度議論してはどうかということでした。

- 8) 8番目は、教員の資質についても、やはり今の時代、誰がというより、どういう教員であることが子どものどういう力を伸ばすのか、そういう子どもの学力、教員の教える力についても議論をしてはどうかということでした。
- 9) 最後に、9番目ですが、学校間の接続、幼小中高大の接続について、何を大事にするのか、兵庫県のオリジナリティーを出してもよいのではないかということでした。

以上が、今日出された大きな柱ではないかと思っています。これらが、今後の議論の観点ということで、9項目申し上げました。

それから、大きな3つ目ですが、今後の議論において、皆さんにお願いするわけですが、今まで、兵庫県は、「魅力・特色づくり」というキーワードで、高校教育を考えてきましたが、「魅力・特色づくり」という言葉は、使い続けると魅力・特色がなくなってしまう部分もあるので、それに替わる新しい言葉を見つけてほしいと思っています。これは、事務局も考えるし、我々も考えますが、今までの「魅力・特色づくり」を上回る良いフレーズを、今回から最終回の7回までの間に出していただきたいということがあります。これは事務局の要望でもあるし、私自身の要望でもあるので、ご協力いただければありがたいと思っています。

本日いくつか出ましたが、議論する上で参考としたい資料、10年後、30年後、50年後の色々な資料であるとか、文科省の教育に対する資料であるとか、これからもこういう資料を出してほしいというものがあれば、出していただきたいと思います。

最後の最後ですが、次回についてです。

まずは、事務局からまとめいただいた、第二次実施計画の評価等について確認をしていただきたいと思います。それから、本日の委員会で色々なご意見をいただきましたが、まずベースになるのは、今日最初にいただきましたように、「どういう力を子どもたちに身につけさせたいか」、これを明らかにすることがそもそものスタートではないかというご発言もありましたし、その通りと思いますので、次回は、まずは生徒に身につけさせる力について議論して整理したいと思います。それを最初のレイヤーにするということですので、そのようなつもりで進めていただければありがたいと思っています。私の今の意見も含めて、事務局のほうで整理していただきますが、次回は、第二次実施計画の評価と課題をまとめるとともに、本日いただいた議論すべき課題にもとづいて協議を行います。

なお、今日欠席された委員もおられますし、今日時間の関係で十分発言できなかつた方もおられると思います。事務局から意見聴取用紙を送付させていただきますので、ご記入いただき、それをあわせて次の資料としたいと思います。

## (5) 事務連絡

## (6) 閉会挨拶

会議でも意見をいただきましたが、これからの先の10年、30年、50年後を考えようとするとき、逆に50年前の状況を考えると、私はまだ小学校1年生くらいでした。その頃、ちょうど大阪で万国博覧会が開催されて、初めて、会場にワンタッチ式の傘が置いてあって、「ボタンを押したら傘が開くんだ」と驚いたことを思い出します。その他、家は黒電話でしたが、友だちのところへ遊びに行った時に初めてプッシュフォンを見た。そんな時代でした。

そういう時代から、50年後の現状を見てみると、電話がスマートフォンに変わり、タブレットが登場し、と、そんな時代が訪れるとは、正直想像もできませんでした。

今から50年後の状況は、ICTも今以上に発達して、さらにグローバルな時代となつて、「世界は1つ」という時代になっていると思います。そのような時代を迎えるにあたり、子どもたちがどのよ

うな力をつけていくのが大切か、というテーマは、この会議の中でも何度も出てきましたが、やはり、皆さんと一緒に考えていくことが大切だと考えているところです。

本日は、それぞれのご専門の分野から、様々なご意見をいただきました。

この協議は一年間続きますので、今後とも、忌憚のない色々なご意見をいただければありがたいと思いますので、どうか宜しく願いいたします。